

## 尺時計

今回は、江戸時代に使われていた「尺時計しゃくどけい」と呼ばれる時計を紹介します。当時、時計は大変高価なものでしたが、尺時計は比較的構造が簡単な普及タイプとして流通したものです。科学館にある尺時計は写真1のようなもので、高さ51センチ、幅8.3センチで、上部にある穴を使って壁に掛けることができます。

上側にある、ガラスのケースに入れられた部分は機械部分になっていて、歯車や天府てんぷ、ひげゼンマイなどを見ることができます。

その下が時刻を表示する文字盤で(写真2)、この文字盤自体は板状になっていて取りはずしが可能です。はずしてみると、中から姿を現すのが糸に吊るされたおもりで、尺時計はこのおもりの重力によって駆動する仕組みになっています。時計を動かすと時間とともにおもりがゆっくりと下に降りていき、おもりにつけられた時刻指標が時刻を示します。



写真1:尺時計全景



写真2:時刻文字盤

文字盤に書かれた数字は九、八、七…という、江戸時代に使われていた不定時法の時刻表記です。当時の不定時法は、日の出前の明け方から日の入り後の夕方までを六等分し、また日の入り後の夕方から日の出前の明け方までを六等分します。つまり、この方式では昼夜の長さが季節により変化するのに伴い、時間の長さも変化してしまいます。一方、時計のおもりは等速で下がります。そこで、時刻指標は可動式になっていて、季節ごとに時刻表示の位置を調整して使います。何とも手間のかかる時計ですが、不定時法という複雑な時刻制度に対応しようとする昔の人の工夫が感じられる一品です。

嘉数 次人(科学館学芸員)